

## 心理的快樂主義の意味について

西 谷 敬

快樂主義について語る場合、善の理論の一つとしての倫理的快樂主義と、人間性（人間の行動）についての理論としての心理的快樂主義が区分されるのが常である。<sup>(1)</sup>しかし歴史的にみると、両者が明確に区別されないで現れることが多い。たとえばベンサムは、彼の功利主義の基礎をなす快樂主義について、快樂と苦痛がわれわれに何をなすべきかを教えると共に、われわれは何をなすであろうかを決定すると述べている。<sup>(2)</sup>實際人間の行動が快樂と苦痛によって規定されているなら、道徳は人間性に反したことを要求しないのであるから、それらが人間にとっての善を指し示していると解することが出来る。このように心理的快樂主義と倫理的快樂主義は関連していると見ることが出来る。しかしそれにも関わらず何をなすかと、何をなすべきかを区別しなければならぬし、又前者から後者を論理的に導き出すことは出来ないのである。

さて心理的快樂主義は、ベンサムに見られるように、人間の全ての行動とこれに関する思考を説明する包括的理論であると考えられる。このような一元論的理論に反対する人々は、人間が必しも快樂と苦痛によってのみ動機付けられていないことを指摘し、それによって彼等は動機の多元論に導かれたのである。このことが正しいとしても、私も

それが正しいと認めるのであるが、それによって心理的快樂主義が全面的になり立たないと云うことには当然ならぬ。しかしこのことが心理的快樂主義に關して問題とすべき重要な点であると思われる。この問題の解明のために、まず快樂主義の基礎をなす概念、快樂と苦痛とは何かを検討することが必要であらう。

善の概念の諸相を分析したフォン・ウリクトは、快樂の概念が倫理學の歴史において重要な役割を果たしてきたにも関わらず、その概念が、特に探究の対象とはならなかったことを奇妙なことに指摘して、この概念の解明のために、暫定的に快樂の三つの主要な形態を區別した。(3) (1)「受動的快樂」、受動的快樂は、感覺やその他の意識狀態に際して感じられる快樂ないしは喜ばしきである。たとえば風景をみることに、又は食物を味わうことによる快樂（感覺的快樂）、或いはそれを想像したり、思い出したりすることによる快樂である。ところで何かを見る（又は味う）ことは、この感覺を生み出した対象に依存する。そしてわれわれは、風景を樂しむとか、食物を樂しむとか云つて、感覺の対象についての快樂について語ることがある。しかし正確には風景をみることに、又は樂（樂しみ）であり、みることに、又は樂（樂しみ）が第一義的で、第二義的にこの感覺の原因としての対象についての快樂に關して語られるのである。(2)「能動的 active 快樂」、ゴルフやトランプなど、人がそれをなすことを好むこと、ないしは熱中することを、或いは行なうことによる快樂のことである。しかし樂しみを獲得するためや時間つぶしのために、或いは熱中してゐるから或いは關心があるから、それ自身のために、或いは事柄から得られるのが、この快樂である。そしてあることを樂しんでいる人は、障害がなければ、その行動をさらに繼續し、ないしは延長しようとするのが常である。(3)「満足又は充足の快樂」、欲求された事柄がそれ自体快樂をもたらすかどうかは別として、欲求し、必要とし、望んだことをなすことによって感じる快樂である。たとえば旅行をすることを望んでいた人が、旅行を實現したことによって感じる喜ばしきである。このようなウリクトによる快樂の分類は、快樂が得られるさまざまな仕方を取りあげて、快樂の概念の含んでいる問

題性を示唆している点で重要であると思われる。しかしここでは快樂が人間に与えられる諸様式がとりあげられているだけであつて、これらの形態の快樂が共通に快樂と呼ばれるために、そこに何か共通した事態があるはずであると考えられる。しかしながらウリクトは、それに触れていない。そこでわれわれは、快樂の本性について、これらの快樂の諸形態を考慮しながら、考察していくこととしよう。

伝統的に快樂と苦痛は、丁度暖と寒のように、反対のものと考えられてきた。苦痛は主として肉体的苦痛であり、しかもそれは肉体の一部において感じられるのである。苦痛は、かゆみや冷たさなどと同じく、一種の感覺である。それと同様に快樂も感覺であると考えられる。實際ある種の快樂は、肉体的快樂であるが、それでも苦痛のように、ある特定部分における快樂とは、普通云わない。たとえば食物を味つて快樂を得た人は、おいしかったと云うが、口の部分においておいしかったとは云わないのが普通である。しかし性的快樂など、肉体の一部に感じられる感覺としての快樂もある。ケニーはこのことを認めるが、<sup>(4)</sup>それだからと云つて快樂一般を感覺と同一視することは出来ないとして、次のことを指摘する。もし快樂が感覺であるならば、快樂とそれを生み出したものとの關係は、因果的關係である。この關係は帰納によつて把握されるが、快樂を生み出したもの（原因）が明らかでなかったり、まちがいがおこつたりする。たとえば胃の痛みの原因などはつきりしないことがある。ところが何に關して快樂を感じるかを常に人は意識しており、それに関してまちがいがおこることはないと考えられるのである。<sup>(5)</sup>又ある因果的關係、たとえば稲妻と雷鳴において、原因と結果との間に時間的間隔があるが、冗談がわかるのと、冗談を楽しむとは同時であり、そこに時間的経過を入れる余地はないとライルは指摘した。しかし快樂の諸形態によつて、快樂とその対象は、さまざまな關係をもつことを後に述べることにする。

又もし快樂が感覺であれば、快樂とその対象とが結びついて同時に意識されるとしても、それらはただ同時に意識されることにすぎない。何故なら感覺としての快樂は一つの出来事であり、その対象となる出来事と同時に生じたに

過ぎないからである。それ以上の関連はないと考えられる。たとえばゴルフを楽しんでいる人が、天気のうちということや、上空を飛行機が飛んでいることを同時に意識しているとしよう。楽しまれるのは、同時に意識されている事柄（出来事）であるとすれば、彼はゴルフと共に、うつつしい天気や上空を飛ぶ飛行機を楽しんでいることになる。しかしこれは事実と反する、彼が楽しんでいるのは、ゴルフであり、自分がゴルフを楽しんでいることを彼は直接的に意識しているのである。<sup>(7)</sup>そこで快楽を感じて考えることにより、快楽とその対象の関係は、二つの独立した出来事の（偶然的）関係とみなされ得るが、それは正しくないのである。

あるいは快楽を感じてすることに反対する次のような議論もなされる。激しい感覚又は感情 *emotion* は、意識を独占してしまい、それ以外のことに集中することを妨げてしまう。たとえば苦痛やかゆみ、更に驚きや怒りなどが人をおそうと、それだけに人間は心をうばわれて、行動が出来なくなったり、行動が妨げられたりする。ところが快楽の場合にはそうではない。反対に、ゴルフをすることを楽しんでいる人は、楽しむことによって一層ゴルフに集中することが出来るのである。この点によっても、快楽は感覚ではないと考えられる。<sup>(8)</sup>

かくして快楽が感覚ではないとするならば、快楽と苦痛が矛盾しないばかりではなく、反対概念でもあり得ないのである。実際ウリクトは、「快い苦痛」は決して言葉の矛盾ではないと指摘した。<sup>(9)</sup>たとえば親が子供を冗談に、ないしは愛情のしるしにつねることによって、子供が受ける苦痛がこれにあたる。子供は苦痛の感覚（出来事）を受けるが、それを快いと判断することがあると云う訳である。ところでそれを裏返しにして「痛い快楽」の場合はどうであるか。ウリクトは、これを痛いとい快いとが入り混った感覚であるとする。<sup>(10)</sup>ここで快い成分と痛い成分が対比されているが、これは両者が対立した概念であることを示す。又彼は、苦痛は感覚であると共に、甘さやからさのように感覚——性質の名稱でもあることを指摘する。そして苦痛の感覚と云うけれども、快楽の感覚とは云わないで、快い感覚と云うのであるから、快楽は感覚——性質の名稱ではないのである。快い感覚の反対は、快くない感覚である。従って快

樂の形容詞「快い」の反対概念は「快くない unpleasant」である。そして後者の下位概念に「痛い painful」があり、「快い」と対立すると彼は考える。<sup>(11)</sup> なお「痛い」の名詞形である「痛み」は、苦痛のように感覚—性質ではないと彼は指摘する。<sup>(12)</sup> 又「快くない」の下位概念として「痛い」が挙げられることをへアも指摘した。<sup>(13)</sup>

しかし先に述べたように快樂は時として感覚として感じられることも否定出来ない事実である。この点に関してオクルストンは、身体的感覚の次元での快樂と苦痛の対と快樂を得ると云う経験の次元における快樂と不快 *displeasure* の対を区別している。<sup>(14)</sup> 不快の概念の中に痛みも含まれているものとして、後者の意味での快樂を、われわれは問題とするのである。

快樂が、たとえ身体状態と関連したそれであっても、感覚と云う出来事であるとは云えないことが明らかになった。快樂は人間の活動において生じるから、快樂は出来事と云うより、活動の性質ないしは意識の性質であると考えられる。たとえばゴルフをすることとゴルフを楽しむ *enjoy* ことは異なった事柄ではない。それを楽しむことは、それをなすことに密接に結びついていると云うだけでなしに、それをなすことを楽しむことは、それをなすことを欲し、それ以外のことをなにもなさうとは欲しないことであると、ライルは考えている。<sup>(15)</sup> そうすれば、ゴルフをすることがそのまま快樂になり、快樂があることはそれに熱中し集中することであるから、快樂は行為を促進させこそすれ、感覚や感情のように行為を妨害することはあり得ない。又何を楽しんでゐるかを人は明瞭に意識しているから、その対象についてまちがうことは、あり得ないのである。この説によつて、快樂とその対象の必然的結びつきが説明される。そして又先に述べた、快樂は感覚ではあり得ないと云う議論に対して、この説は有効な答えを与えているのである。ライルが主張したように、楽しむことが欲求と分ち難く結合し、それと同一視される場合において、あることを欲し、それをなしていないながら、しかも楽しまないことはいかにして生じるのであろうか。又二人の人が同じことを欲し、同じことをなしながら、しかも一方は楽しみ、他方は楽しまないと云うことは、この説では説明出来ないのである。

ただ前提を否定することによって、この説を守ろうとするだけである。その上又次のような事実がある。先に述べたように、冗談がわかることとそれを楽しむことは同時であると指摘された、しかし冗談がわかって、楽しまない場合がしばしばあるのである。こうしてみると快樂が活動に内在した性質であることに疑問が生じてくる。

更に又快樂が活動の性質であるとすれば、活動に入ると同時に快樂も感じられるはずである。事実そのようなこともあるであろう。たとえばゴルフの好きな人は、ゴルフのことを考えただけで、快樂を感じるであろう。しかしゴルフのプレーを楽しんでいる人の場合、ゲームの開始と共に快樂を感じるであろうか。むしろ通常ゴルフのプレーの進行に伴って、ゴルフが段々楽しくなってくるのではなからうか。勿論ゴルフを楽しまないで終ってしまうこともあり得る。こうしてみると快樂を活動の性質とすることには、一層の問題がある。

快樂を感覺と考える人が、ウリクトの分類における受動的快樂をモデルにしているように、快樂を活動の性質とする人は、能動的快樂をモデルにとっていることは明らかである。行爲することにおいて、人は樂しむと後者は主張するが、この時彼が快樂と云う抽象名詞を用いないで、樂しむと云う動詞を用いていることに注意しなければならない。日常使ひなれた言葉の用法と抽象的一般的名詞の用法にくいちがいのあることは、ライルも認めている。<sup>(17)</sup>このくいちがいについて、少し考察することとする。それらの形容詞である *pleasant* と *enjoyable* について、前者は味覺や聽覺等の感覺に関して用いられるが、後者は、活動に関して使用されるのが常である。<sup>(18)</sup>このようにこれらの概念には適用範囲のちがいが見られる。<sup>(19)</sup>又普通 *g* (と云う事柄) を樂しむことは、*g* から快樂を得ることと同義であると考えられる。さて「樂しむ」は他動詞であり、常にその対象と直接的に関っている。だからこの場合に、快樂の対象を見失ったり、見誤ったりすることはないと考えられるのである。それに対して *g* から快樂を得ると云う場合、*g* と快樂を得るとの關係は多義的で、先の場合のように意識の志向性の問題であるよりも、むしろ因果的關係であると解される場合がある。従つて *g* を樂しむことと、*g* から快樂を得ることが多くの場合一致していても、又これらがくいち

がう場合が考えられるのである。欲求の充足によつて快樂を得ると云う場合において、たとえば欲求されていた旅行自体は楽しくなかった（だから旅行を続けようとは思わなかった）としても、旅行をしたいと云う欲求が満たされたことによつて快樂を得る、つまり旅行から快樂を得ることがあるのである。こうして快樂と楽しむことを單純に同一視することは出来ないし、後者が限定された意味をもつことに注意しなければならない。

快樂が感情ではないと云う理由の一端について先に触れた。それにつけ加えて、又別の理由をあげることが出来る。それは、快樂をひきおこすことは可能であるが、感情をひきおこすことは出来ないと云うことである。たとえば恐怖や驚きの感情を他人にひきおこすことは出来る。しかし努力して、自分に恐怖をひきおこすことは出来るだろうか。たとえば高い展望台の端に立つて、真下を見下すことによつて恐怖感を覚えることがある。その場合でも恐いけれども端に立つとか、あるいは恐さを感じるために端に立つとかした時には、恐いと云う氣持をもつと云うより、むしろスリルを味つているのである。しかし突然風などが吹いて、飛ばされるかも知れない、又は倒れるかも知れないとふと感じた時に、眞の恐怖を感じるのである。同じことが後悔や喜びについて云える。従つて恐怖におそわれると云う表現にみられるように、感情は生み出されるものではなく、与えられるものである。それに対して快樂をわれわれは、ひきおこすことが出来る。手を上げようと思えば、上げることが出来るような仕方、直接的に快樂を志向し、これを生み出すことは出来ないのであるけれども、何故なら快樂そのものを直接目的として行爲することは、まずないし、そうしようと思つても實現出来ないからである。ゴルフや旅行や食事をなすことを通じて、快樂を得ることが出来る。以前にこれらをなすことによつて快樂を得ることが出来たから、今度も快樂が得られるだろうと考えて行動し、快樂を得ることが出来る。しかし以前にしばしば成功したからと云つて、今度もそうなるとは限らない。従つて快樂を生み出すことにおいて、偶然的要素も作用していることを認めなければならない。それに対して苦痛は、ある条件の下では必然的に生じると云える。従つてこの点においても快樂は、感覺であるとは云い難いのである。さて間接的な仕

方でひきおこすことは可能であるけれども、確実に生じせしめることは出来ないと云う点で、快樂は氣分に類似している。氣分は天候にたとえられるが、これと同じように本来自然に生じて、又變化してゆくものである。しかしわれわれは、過去の経験に従って、たとえば映画をみることによって、氣分を轉換して、陽気なとか悲しいとかの氣分を生み出すことが出来る。

感情と氣分は、後者が特定の対象に関連をもたないと云う点によつても、區別される。<sup>(21)</sup>感情は全てその対象をもつが、又感情はある原因によつてひきおこされるものである。但しその原因をわれわれは、自由にすることが出来ないのである。この感情の対象とその原因とは必しも一致するとは限らないのである。<sup>(22)</sup>それでは快樂についてはどうであろうか。快樂を活動ないしは意識の性質であると考えた人は、先に述べた如く、快樂とその対象は直接的に結びついていると主張した。しかし快樂を活動の性質であると云う主張を承認することが出来ないのと同様、快樂とその対象の直接的關係を認めることは出来ない。先に受動的快樂に関して見たように、そこには二重の關係が存在し、快樂とその対象の關係を一義的に定めることは出来ないように思われる。又先の例で、旅行を楽しむと旅行から快樂を得るとは、必しも一致しないのである。それにしてもわれわれは、常にある事柄に関して快樂があると云うことが出来、この点で快樂は氣分とは區別されるのである。

快樂は、人間にとって望ましいしは好ましい <sup>(23)</sup> preferable ものであり、それ故に人は快樂をもたらしものを欲求する。そして欲求の満足は、どのようなものを欲求しようと、快樂を人にもたらす。従つて快樂は、欲求の内に存すると考えられる。しかし受動的快樂、たとえば食事を味うことによる快樂は、欲求とは一応独立に与えられるから、(何故なら特に欲求していなくとも、おいしいものはおいしいのであるから)従つて常に欲求があつてはじめて快樂が存在するとは云えない。しかしながらこの味覚に伴う快樂においても、それが望ましいしは好ましいと云う判断がなされている。そしてゴルフや旅行を楽しむ人は、これらを欲求することによつて、勿論これらをなすことが好ま



しいと考えている。又それらの欲求を満足させた人は、このことが好ましいとするのである。そこであることに關する快樂は、それを好ましいとする態度の内に存すると考えられる。さて人々が好ましいと判断する事柄は、人によってさまざまであり、従つて人それぞれに異なつた快樂がある。こうしてみると快樂は、その人にとって主觀的な事柄であると言ふことが出来る。ところであることがら、たとえばゴルフより旅行が好ましいと言ふ場合、さまざまな見地から好ましいと判断される。たとえば健康の見地から、經濟の見地から、外聞の見地から等々、それらの見地とならんで快樂の観点から好ましいとされる場合がある。従つてあることを好ましいと判断したからと云つて、直ちに快樂が存在するとは限らないのである。そこで快樂の観点から好ましいと云ふことは、何を意味するのであるかを説明しなければならぬ。

シジウィックは、快樂をわれわれが望ましいあるいは好ましいと認める一種の感情であると定義した。<sup>(24)</sup> この定義において快樂の對象が言及されていない、しかしある種の快樂が、他のものに比べて量的に少なかったとしても、質的にすぐれていると判断される場合に、それが好ましいとされるのは、感情自体に基づくより、その快樂の關る對象に基づくのであることを、彼は認めている。<sup>(25)</sup> 快樂は、その對象によつて質的によりすぐれているとされたり、又そうでなかつたりすると云ふことは正しいと思われる。それでは快樂の對象に対して、感情又は好ましさは、いかなる仕方であるのであろうか。シジウィックは、ある事柄についての感情が望ましい、ないしは好ましい性質をもつことを快樂と考えている。そして彼は、感情の概念を広い意味で使用し、感情の内に感覺的經驗だけでなしに、満足感などを含めて考へている。<sup>(26)</sup> そこで受動的快樂において、たとえば食事の味覚が好ましいとされる時に、快樂があると理解される。又充足による快樂においても、充足感が好ましい（性質をもつ）ことが即ち快樂をもつと云ふことである。ところで味覚と云う感覺は、好ましいこともあれば、そうでないこともある。それに対して充足感<sup>(27)</sup>は、常に好ましい、何故なら充足感<sup>(28)</sup>は、好ましいこと即ち欲求充足の成果なのであるから。このように分析をなすことによって、これら

二種類の快樂において、感情と好ましさの関係が異なっていることが明らかになる。受動的快樂について更に考察を進めると、シジウィックは、好ましいと云う性質をもった感覺經驗を快樂とするのであるが、好ましいとすることは、その經驗に対してある態度をとることであるのだから、それはその經驗に内在した性質であるとは云えない。食事における感覺經驗において見出される甘さやからさが、快樂を構成しているとは思われない。それらの感覺—性質の複合によっておいしいと判断される場合に快樂が存在し、そこにはあるものを好ましいとする態度と共に氣持がよいと云った感情的調子が存在する。好ましいを直ちに、快いと同一視することは出来ないことを先に論じた。人が快いという場合には、そこに感情的調子が常に存在している。しかし氣持がよいと云った感情的調子において、何となく氣持がよいと云う場合もあつて、ある特定の対象とは関連しないことがある。かくしてシジウィックの快樂の定義において、感情の概念がいまいであり、又定式化に問題があるけれども、快樂が好ましいことと感情的要素の複合であることを指摘した点で、彼は正しいと考えられる。快樂が好ましさと感情的要素の複合からなることを、ブランドも主張している。<sup>(7)</sup>しかし彼がこのことを説明して、あるニユースを聞いて楽しいとする時、常にある感情、たとえば誇りや喜び等が現存すると述べる時、そこに誤解があるように思われる。何故なら誇りや喜びの感情は、ニユースを聞くこととそれを楽しむことは、やはり別の經驗だからである。快樂はむしろ、ブランドが別の個所で述べたように、ニユースを聞くと云う經驗のある次元 *dimension* (たとえば色におけるあざやかさのように) であると考えられる。あることについての快樂は、その經驗と別の經驗でもないけれども、又その經驗に内在した性質でもないものであり、むしろそれに付随したものである。

更にウリクトの分類による能動的快樂について考えてみる。シジウィックの定式によると、ゴルフをすることを楽しむとは、ゴルフをすることについての感情が好ましいと云うことになる。しかしそれではゴルフをすることについての受動的快樂が成立するのみであると考えられる。能動的快樂において、ゴルフをすることが楽しい即ち好ま

ましいことである。そしてライルが述べたように、ゴルフを楽しむとは、ゴルフをすることを欲し、それ以外のことをなそうとは欲しないことであると考えられる。しかしこのライルの定義は、広すぎるように思われる。たとえば悲惨な災害の救助にあたる人は、救助することに集中し、その他のことをすることを欲しないのであるが、それに附随して怒り、悲しみ等の感情が生じて、救助することを楽しむとは云えないのである。そこであることを楽しむ即ち快樂を得ると云う場合には、それが望ましいしは好ましいと云うことだけではなく、先に見た如く、感情的調子が伴なっているのである。ある活動が好ましいとされても、そこに氣持のよさと云った感情的調子が伴なうかどうかは偶然的であるが、これを伴なっていることが多い。又この感情的調子がみられると行為が促進されるのである。シジウィックは、そのことを、行為を持続させ延長させるように促す一種の感情として表現している<sup>(30)</sup>。このように快樂は、やはりある経験に付随して生起し、好ましさと感情的調子を複合した経験であると云える。そしてウリクトの分類した快樂の三形態においてそれぞれ異なった活動のあり方に対しての好ましさと感情的調子の複合がみられる。

快樂が活動の性質であることを主張したライルは、散歩の楽しみは、散歩に付随するもの、たとえば意識された結果ではないとした。そうとした場合、散歩の歴史と散歩者に対するその快きの歴史と云う二つの歴史が成立することになるだろうが、そうすれば散歩の後でも散歩の楽しみが残るつづけると云うばかげたことになると彼は主張する<sup>(31)</sup>。ライルはここで快樂の時間計測は出来ないことを説明しているのであるが、このことは正しいとしても、散歩の結果を時間的に限定した意味にとりすぎている。散歩している間の時間に散歩を楽しんだと云うことは出来るとしても、散歩の過程の間に生じたさまざまな外的又は内的出来事（思考や感情等々）と並んで、快樂の経験も存在する。そして散歩している間に、ある時は激しく、又ある時に無感動に近く感じられる快樂の歴史をたどることは出来るはずである。この意味で散歩の歴史と並んで散歩の楽しみの歴史を記述することが出来る。ライルは又快樂の概念を二つの側面から考察し、一方では活動の性質としての楽しみを主張し、他方においては喜び、有頂天、楽しみと amusement など

の気分と云う意味での快樂があることを指摘した。<sup>(32)</sup> それにも関わらず彼がこれらの要素の複合としての快樂の概念に向かないで、両者を異質なものととして取扱ったのは、気分は人を行動に動かす動機（性向）とは異なった種類のものであると彼が考えたからに他ならない。<sup>(33)</sup> しかしシジウィックが指摘したように、快樂においてある種の感情（むしろ気分と云った方がよい）が行動を促進する（持続させる）場合もあるのではないだろうか。

快樂の本性について考察して一応の結論に達したので、次に心理的快樂主義の本来の問題即ち行為と快樂がいかなる仕方に関連しているかを検討しなければならない。

人があることを楽しんでいるかどうかを試す一つの方法は、彼が今なしていることを継続するかどうか、又は彼がそれを再びなそうとすることを見ることであると、ケニーは指摘する。<sup>(34)</sup> 実際この検証の方法は有効であろう。何故なら楽しんでいるかどうかは、本来本人にしかわからないのである。楽しそうな様子をしていても、お芝居をしているのかも知れない。逆に全然楽しくない様子に見えても、本人は結構楽しいのかも知れない。その点を客観的に知るよい手がかりは、その人の行動を見ることである。それだけでなしにケニーの指摘が重要なのは、行動と快樂の關係を考えようとする時に、彼のあげた二つの場合を区別して論究することが必要であると思われるからである。まず第一の場合、楽しむことは、行為を持続させ、延長させることは、楽しむことと行為とを同一視することがなくとも、経験的事実として誰の目にも明らかである。行為について楽しまないとすれば、それを中止したり、早く切り上げようとすることになるのである。このように快樂は行為を促進する動機として作用することが認められる。しかしこの場合の快樂は、すでになされて、現に続いている行為を持続させ、延長させると云う意味で行為の動機ないしは理由として作用しているとしても、新たに行為を生起せしめると云う作用は果していないのである。そこで第二の場合について考察しなければならない。

ある人が過去になした行為を、その後何度もくり返してなしたとしても、それをもって快樂のためになしたと主張することは出来ない。偶然そうなたたのかも知れないし、單なる習慣のためにそうしているのかも知れないからである。それにしても何度となくくり返すことは、強制されているのでなければ、それを楽しんでいることの一つの証拠となる。しかし人は一度楽しんだことを、必ずくり返してなすとは限らないのであるが、くり返して行動しがちである。一度楽しんだことを、楽しんだがためにくり返す人は、快樂を得るためにくり返し同じ行為をなすのである。このことを一般化して、全ての行為は快樂を動機として生じると云うのが、心理的快樂主義の主張である。これを擁護するためのいくつかの議論をとりあげて検討することとしよう。

まず行為は、欲求によって生じるものである。そして行為することによって欲求は充足され又、それによって快樂が得られる。このように欲求と快樂は必然的に結びついているのであるから、欲求をみたすためになされる行為は又、快樂を得るためになされると考えられる。かくして快樂が行為を規定すると想定される。このようなもってもらしい快樂主義の主張に対して、欲求の充足による快樂は、その同一の欲求の対象ではあり得ないとウリクトは指摘する。何とならば充足は欲求を前提し、欲求は又欲求されるもの即ち対象を前提とする。従って欲求の対象はその欲求をみたすことによる快樂とは異なるのである。<sup>(35)</sup>彼は欲求の充足による快樂が、新たな欲求の対象となり得ることを認めるが、常にそうなるとは限らない、むしろそれが新たな欲求の対象となるかどうかは偶然であることを彼は主張する。<sup>(36)</sup>かくして心理的快樂主義は成立たないことが主張される。

又心理的快樂主義を擁護する別の次のような議論がなされる。確かに人は快樂を欲求しないで、旅行、ゴルフ、食事を欲求して、それらを楽しんでいる。そこで快樂だけが追求する値打のある唯一のものである人が次のように主張したとしよう。ゴルフや食事等に時間をついやしている人々はまちがっている。何故ならこれらは快樂のための手段に他ならないのであるから。しかし自分は他のものに目をくれず、快樂そのものを求めることにしようと、そうした場

合その人はまちがつているのである。それは丁度、われわれは色だけを見るのだと云つて、人や木や建物を見ることを否定する人に似ている。彼はわれわれの見るものには全て色彩があると主張するのであれば、正しいのであるが、それをわれわれはただ色彩だけを見ると云うことによつてまちがつたのである。それと同様にわれわれは、ゴルフや食事を欲求するのであるが、それらを通じてわれわれは常に快樂を求めているのである。こうしてノウエルスミスは、前者のような欲求するや享樂すると云う動詞の「客觀的直接目的」と後者のような「内的直接目的」を区別しようとする。このことの説明として彼は次のような例をあげる。爆撃機のパイロットは、港、工場、駅等を狙つて爆撃するが、彼はそれでもつて目標を狙つて爆撃しているのである。彼はいつでも目標を狙つて攻撃している。何故ならば彼の狙つたものが目標なのであるから。<sup>(38)</sup>それと同様に人は、常に快樂を欲求している。何故なら「あるものを欲求することは、それを楽ししいと期待することであり、あるものを楽しむことは、それを楽ししいと知ることなのである」<sup>(39)</sup>から。かくして快樂主義者は、快樂を欲求の対象の内にある「共通の成分」<sup>(40)</sup>と考えるのである。

この主張において問題となるのは、あるものを欲求することは、それを楽ししいと期待すると云うことが何を意味するかである。これを欲求の定義であるすると、われわれの行為は全て快樂をめざして行なわれると云うことは当然の帰結となる。實際われわれは、自分にとつて望ましい、ないしは好ましいものを欲求している。そこで望ましいこととや好ましいことは、行為の選択の原理として作用している。快樂も好ましいものの一つにあげられる。しかし快樂だけが好ましいとは考えられない。そうすれば欲求のこの定義を認めることは出来ないこととなる。先の主張が欲求の定義ではないとすると、次のような解釈が考えられる。全ての人間はその欲求するものが快樂をもたらずと信じて、欲求するのであり、その信念は經驗的事実であると。實際快樂のために行動すると云うことは、行為と欲求の窮極的理由となることは認められて<sup>(41)</sup>いる。しかしそれだからと云つてわれわれを行為へと促す欲求が全て快樂を目指しているとは云えない。たとえばカントの主張したような義務に従う行為のように快樂を目的としない行為があげられる。しかし

その場合にしても窮極的には快樂を、義務に従うことによる快樂を欲求していると快樂主義者は主張するかも知れない。たとえそれを認めたとしても、テイラーが指摘しているように、ある場合には欲求によって快樂を説明しなければならぬように思われる。<sup>(42)</sup>たとえば食事における快樂は、われわれが空腹の時即ち食事に対する欲求の激しい時に高められるのである。この点において快樂は欲求の関数である。それに対してもこの欲求は快樂を志向するものであり、激しい欲求において快樂を強く追求することによって快樂を獲得するのであり、かくして（志向された）快樂が説明の根拠となるのである。従って快樂主義の立場は、いささかも揺がないと云う主張がなされるかも知れない。しかし快樂を強く意識することによって、快樂が結果としてかえって得られないと云う「快樂主義の逆説」<sup>(43)</sup>がここに成立する。従って欲求は必しも快樂を志向しないが、それにも関らず欲求に快樂が依存する場合を認めなければならない。かくしてわれわれの欲求は全て快樂を志向する、従って全ての行為と欲求は、快樂の觀念によって説明され得ると云う強い意味での心理的快樂主義は、なりたたないことは明らかになった。しかし同時に快樂が行為の動機（理由）として作用していることがあると云う弱い意味での心理的快樂主義は、成立つことは認められる。行為の直接目的は、快樂ではないとしても、その目的を選んだのは快樂を得るためであると云うことは、日常生活においてしばしば見られることである。ここでは快樂を得るためになされる行為が多いか少いか問題ではなく、快樂を目指して行動することは、一体どのような事態であるのかが問題である。そのためにこれと他の欲求とを比較する必要がある。

食欲は、人間のもつさまざまな欲求の一つにすぎない。食欲に關係がないと思われる欲求も多い。しかしこの欲求が全然充たされなければ、生物としての人間は生き続けることは出来ない。そこでどうしてもある時点で食欲は充足されなければならない。この意味で食欲は人間の基本的で必然的な欲求であると云える。生物的生理的意味での基本的欲求とならんで心理的社会的意味での基本的欲求（たとえば社交性）<sup>(44)</sup>があると考えられる。しかし快樂への欲求は、基本的であると云うことは出来ない。快樂を追求するのもしないのもその人の自由であり、快樂を追求しなくてもす

ますことが出来るからである。何故快樂を得るために行動するかは、その人の価値観に關係し、この価値観の構造や起原の問題にはここでは触れない。又ここでは快樂を自分の快樂に限定するけれども、それによって生じる利己主義の問題には立入らない。快樂を自分の快樂に限定するのは、快樂を生み出し享受するのは、自分であり、その限りにおいてそれはその人間個人に関する主觀的事柄であるからである。問題はただ快樂追求とは、人間のどのような生き方であるのかを記述し、それを通じて快樂追求がもつ意味を示唆することにある。

快樂は欲求の直接目的とならないで、ゴルフや食事を欲求することを通じて間接的に追求される。このことは快樂に限らず、富、名譽、健康、知識についても云える。これらは全て、その人の努力によって生み出され、獲得されたものである。しかしこれらは快樂と異なり、獲得するための方法はある程度客觀的に定まっており、又これらを獲得したことは客觀的に確認される。しかし知識の場合、確認の仕方に問題があるとも考えられるが、それは知識の範圍が確定していないからである。それにしても主觀的知識はないと云えるので、知識があるかどうかを、他人にも自分にも確認することは可能であると考えられる。これらを獲得したことを客觀的に確認出来るのは、人はこれらのものを客觀的世界に働きかける自分の仕事の成果として確認し、又他人も確認するからである。それに対して快樂は、その獲得の方法において、又獲得したかどうかにおいて主觀的である。当人だけにしか獲得したかどうかはわからないのである。又快樂は、行動を通じて得られるが、本人の努力によって得られたものとは必しも考えられない。快樂主義の逆説に見られるように快樂を努力によって獲得しようとすればするほど、かえって思ったように快樂が得られないことになる。そこで快樂を獲得するために行動しても、その成果は不確定であるから、快樂を得る確実な手段に關して合理的選択はないと考えられる。そこでもっぱら、あることをなすことによって快樂が得られるだろうと云う本人の信念が問題である。そして快樂を得るために他のことになしに何故そのことをなすか、たとえばゴルフではなく旅行するのは何故かを説明する、行為の選択原理を考察しなければならない。



まず快樂を追求するために、それをすでに知っていなければならないと思われる。かつてあることを行なつて快樂を得た場合に、それをくり返すことは大いにあり得る。しかし他でもないそれを選んだのは、その人の過去の經驗に基づくだけでなしに、彼がそれに関心をもち、又それが彼の性格に合致しているからである。確かに全ての行為は行為者の性質の表現であるが、又行為において働きかける対象の性格によつて規定される面がある。ところが何に關して快樂を得るか、何を望ましいしは好ましいとするかにおいては、もっぱらその人間の関心と性質とが問題である。「各人がみこすところの快と苦は、彼の現在の性格に合致したものであらう。」とデュワイは指摘し、狡猾で非良心的な人間は、彼の狡猾な行為によつて快樂を得るだらうと述べる。ライルも又ある行為を楽しんでいる人は、その行為によつて彼の「性質propensityの実現」をなしているとする。實際アリストテレスが述べたように、快樂ほど人間の本性に結びついているものはないのである。<sup>(46)</sup>かくして快樂を得ようとして行動することは、あるがままの自己を肯定し、實現することである。だから自分の好み、才能、関心、性格に従つて行動し、享樂する趣味人の生活に、その典型を見出すことが出来る。

しかしすでに經驗し、なれ親しんだ快樂をくり返し求める代りに、それらに飽いて全々別の新たな快樂を追求することもあり得る。その快樂はどんなものかわからないし、又どうして得ることが出来るかも知られていない。それでもやってみなければわからないとして、人は不確かな目標に向つて行動する。こうした行動をする人は、現状に従つて又自分に退屈しきつて、何とかしてそれからのがれるために、新しい刺激を求めて行動するのである。たとえば何か面白いことはないかと思つて町にぶらぶら出てみる人が、これにあたる。このような仕方で人が快樂を求めるのは、われわれがすでに經驗した快樂を目的にすることが出来るのであるが、同時になれ親んだら快樂は弱まつてくると云う快樂のもつ逆説的性質に基づいているのである。快樂のこのような性質は、快樂には感情的要素が含まれていることに由来する。實際恐怖や悲しみや有頂天をもたらず出来事もくり返されれば、その感情ないし気分は弱まってくるのが常で

ある。それに対して自分の好きなこと、欲求していることは、くり返し行なうことによってあきる場合があるかも知れないが、又くり返し行なうことで欲求が強くなることがむしろ多い。たとえば酒好きな人についてこのことが云える。こうして快樂を求めて行動する人の行動の選択原理を二つの方向において見出すことが出来る。そしてこの二つの方向は、快樂を構成する二要素に基づいていると思われる。

従つて快樂を求めて生きている人がどのような生活態度をとるかは、確定出来ないように思われる。一方において自分のからに閉じこもつてなれ親んだ自分の世界に生きるか、他方において何でもよいから目新しいことに向つて放浪するか、二つの対立した生活態度に分れるように思われる。第二の生き方において人は、外の世界とそこにおける新しい刺激に心をうばわれ、自己を見失っているように考えられるが、求められている新しい快樂において、それを樂しむ自己の新しい側面を発見しようとしているのである。彼は自己の現状に不満であるとしても、この不満は表面的であるのとどまつて、この現状を否定して、自己を改革し、向上することを彼は望まないし、又そのために客觀的世界に働きかけることを求めないのである。彼は自分の新しい側面を見出すことにおいて、あるがままの自己を再確認し、肯定するのである。この意味で彼はやはり自己に満足して生活している。従つて対立しているように見える二つの生活態度は、この点において根本的に一致する。つまり快樂追求のために行動する者は、自己に満足し、自分に合致した快樂を受け入れようと云う消極的自己實現をはかつているのである。

(1) 註 利己主義についても、同様な区別がなされる。利己主義

と快楽主義は関連していることが多いが、前者では利己主義の問題には立ち入らない。

(2) Jeremy Bentham, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation* (1780) Hafner Library of Classics (1948) P1

(3) Georg Henrik von Wright, *The Varieties of Goodness* (1963) R. K. P. P64 f. 彼は又ヘローニウスに『善の区別』を記している。C. D. Broad, *Five Types of Ethical Theory* (1930) R. K. P. P66f, 187, 191. of Henry Sidgwick, *The Methods of Ethics* 7th ed (1906) The University of Chicago Press (1962) P48, 127

(4) Anthony Kenny, *Action, Emotion and Will* (1963) R. K. P. P128 cf. W. B. Gallie "Pleasure", *Aristotelian Society Supplementary Volume XXVIII* (1954), quoted by T. Penelhum "The Logic of Pleasure", *Philosophy and Phenomenological Research*, vol 17 (1957) P491

(5) *ibid.* P128 ff. 133

(6) Gilbert Ryle, *Dilemmas* (1954) Cambridge University Press P61

(7) William P. Alston "Pleasure", *Encyclopedia of Philosophy* (1967) ed. P. Edwards, Collier-Macmillan vol VI P342

(8) *ibid.* P342, G. Ryle "Pleasure" (1954), *Moral*

*Concepts*, ed. J. Feinberg (1969) Oxford P20 ライルは「快楽が独立した出来事ではなうことによつて、それが感覚ではなうことを前掲書においても力説している。

(9) von Wright, *ibid.* P57, 71

(10) *ibid.* P71

(11) *ibid.* P70

(12) *ibid.* P69

(13) R. M. Hare, "Pain and Evil" (1964), *Moral Concepts*, ed. Feinberg (1969) Oxford P31

(14) Alston *ibid.* P341

(15) G. Ryle, *The Concept of Mind* (1949), Barnes & Noble (1961) P108

(16) Alisdair Mac Intyre, "Pleasure as a Reason for Action", *The Monist* vol 49 (1965) P224, cf. A. Kenny, *ibid.* P145

又ペリーは楽しむという意味での快楽を意識あるものは活動の「性質」又は「属性」とするが、しかし快楽と意識又は活動とは偶然的関係しかもたない場合もあることを認めている。だから快楽が、意識又は活動に内在しているとは必ずしも考えられない。R. B. Perry, *General Theory of Value* (1926) Harvard University Press P277 更にペリーは「快楽を人間の身体的条件と関連付けて考察しているが、前者とは当面の問題とは関係がなうので、度外視する。

G. Ryle, *Dilemmas* P63

(18)(17) A. Mac Intyre, *ibid.* P220

- (19) 又快樂 pleasure と楽しみ enjoyment について、哲學者は前者を広い意味で用いて、快樂一般を指示するが、一般的には酒、女、歌と云った肉体的快樂をさすのが常である。それに対して後者は、快樂一般をさす、より広い概念であると云う指摘がなされている。— P. H. Nowell-Smith, *Ethics* (1954) Penguin Books P138f, Richard B. Brandt, *Ethical Theory* (1959) Prentice-Hall P 304 —しかしこれらの概念の区別は、当面の問題とは余り關係がない。但し快樂を、これまでもそしてこれから、快樂一般の意味で使用するのである。
- (20) G. Ryle, *The Concept of Mind* P99
- (21) G. Ryle, *Pleasure* P21
- (22) A. Kenny, *ibid.* P71
- (23) 望ましいと好ましいは、価値評価の意味で使われることが多い。従って望ましいとは、欲求する価値のある、ないしは欲求すべきであると解されるのである。しかし、(11)では両者とも規範の意味ではなく、記述の意味で用いていることに注意していただきたい。つまり望ましいとは、望まれ得るないしは人が欲求しがちであると云うことなのである。
- (24) H. Sidgwick, *ibid.* P128 cf. P42, 127
- (25) *ibid.* P128
- (26) *ibid.* P127
- (27) R. Brandt, *ibid.* P306 f.
- (28) *ibid.* P306
- (29) *ibid.* P305
- (30) H. Sidgwick, *ibid.* P42
- (31) G. Ryle, *Pleasure* P21f
- (32) G. Ryle, *The Concept of Mind* P107ff. cf. Ryle, *Pleasure* P26ff
- (33) G. Ryle, *ibid.* P99
- (34) A. Kenny, *ibid.* P135
- (35) von Wright, *ibid.* P83 (この議論がかつてバットラーが心理的利己主義に対してなした議論と類似することは、フランクナが指摘する通りである。
- (36) W. K. Frankena, *Ethics* (1963) Prentice Hall p70, cf. *ibid.* p 19f
- (37) *ibid.* P83
- (38) Nowell-Smith, *ibid.* P136
- (39) *ibid.* P136
- (40) *ibid.* P137
- (41) *ibid.* P115, 138, A. Kenny, *ibid.* P144
- (42) Charles Taylor, *The Explanation of Behaviour* (1964) R. K. P. P227
- (43) H. Sidgwick, *ibid.* P48 f, 136
- (44) cf. A. Kenny, *ibid.* P124
- (45) John Dewey, *Theory of the Moral Life* (1932) Holt. Rinehart and Winston (1960) P40

- (46) G. Ryle, *The Concept of Mind* P108  
 (47) アリストテレス、ニコマコス倫理学 (X, 1, 1172 a 20)  
 高田三郎訳岩波文庫、下、一四九頁  
 (48) A. Mac Intyre, *ibid.* P219

Kei Nishitani

## On the Meaning of the Psychological Hedonism

The concept of pleasure is a historically important concept of ethics, but, as G. H. von Wright says in *The Varieties of Goodness*, "it is surprising how little this concept has been made the object of special investigation." Wright distinguishes three forms of pleasure, in order to determine the compass of the concept. The first is passive pleasure. It is the pleasure attributed to sensations and other states of consciousness, and secondarily to their causes. The second is active pleasure, which man experiences in doing things that he likes and enjoys. The third is the pleasure of satisfaction. It is the pleasure which we feel at getting that which we desire or want.

I think these are the three ways of getting pleasure, but it is necessary to understand the common nature of pleasure which is to be found in these ways. There are three theories on the nature of pleasure.

The first theory asserts that pleasure is a sensation. It is pertinent to some pleasures such as sexual pleasure. But we cannot say that all pleasures are sensations which are felt at some parts of the body, like pains. Pleasure is always pleasure of some object which man is immediately conscious of. On the contrary a sensation is an independent event, causally or sometimes casually related to the object. Thus pleasure is not a sensation, then pleasure and pain are not contraries, rather pleasure and displeasure are contraries.

The second theory maintains that pleasure is a property of activity or consciousness. According to Ryle, to enjoy digging is not both digging and experiencing something else as a concomitant or effect of the digging; it means that a man digs with his whole heart in his task. But pleasure does not necessarily accompany the activity which he wants to do. And it is not felt from the beginning of the activity, rather it is felt gradually during the activity. Therefore the second theory cannot be accepted. In this theory man uses the word enjoy, and to enjoy something and to get pleasure from it are usually considered the same. But I think the latter is more ambiguous. In some cases, a man gets pleasure from the trip which he has long desired, though he did not enjoy the trip itself. For he gets satisfaction of the fulfilling the desire. In this theory the active pleasure is the issue in question, but it does not deal with other forms of pleasure as pointed by Wright.

The third is called the motivational theory. Pleasure originates from desire. It can also be the object of desire. But it is not always so, because the pleasure of taste is sometimes felt without desire. Nevertheless, insofar as the taste is pleasant, it is desirable, or preferable. Then we can define pleasure as preferable experience. But pleasure is not the only experience desirable or preferable. Therefore we must qualify the preferableness, in order to determine the nature of pleasure. When we feel something preferable, we call it pleasant, as in Sidgwick's definition of pleasure: "the kind of feeling which we apprehend to be desirable or preferable." (*The Methods of Ethics*) But I think the word "feeling" in this definition is ambiguous. The taste, the satisfaction of desire and enjoyment of digging are not the same kind of feeling, the first is sensation, and the last is sometimes denied to be a feeling. Besides, the feeling is considered either emotion or mood. We can bring pleasure into being by

such ways as eating, digging, but we cannot produce emotion by our efforts, for emotions are given to us. In this point pleasure is like mood. Some think pleasure in terms of hedonic tone. And in enjoying digging there is a concomitant tone which does not necessarily accompany digging. But if pleasure is only a feeling tone, then it might be neither related to some object, nor to the motivation. Thus pleasure is an experience that includes two aspects, i. e. preferableness and feeling tone, which are pointed out by Brand as two elements of pleasure, and we can also find in Ryle the similar point. Thus we come to the compound theory of pleasure.

When an object pleases us, it becomes a motivation and we are urged to seek more. The psychological hedonism generalizes this fact, and insists that every action of man is motivated by pleasure. We admit that pleasure is always related to desire, but we can say that the immediate object of desire is different from pleasure. Against this criticism Nowell-Smith explains pleasure as "internal accusative" of desire. According to him (and J. S. Mill), the desire for food, golf, trip, etc. means from another viewpoint the desire for pleasure, for to desire something is to expect it to be pleasant. But I think this proposition is not always valid, for in some cases pleasure depends on desire. A psychological hedonist, however, might assert that even in this case we desire pleasure ultimately, and vindicate his position. Then I must point out the so-called paradox of the hedonism: the desire in this case does not aim at pleasure. Therefore I conclude the psychological hedonism in the strong sense that every action is motivated by pleasure does not hold good, but the psychological hedonism in the weak sense that some actions are motivated by pleasure is valid. Then the problem of the psychological hedonism is to make clear the characteristics and meaning of the action motivated by pleasure.



Sometimes we desire pleasure, and sometimes we desire food, books, knowledge, and wealth, etc. We do not always desire food, but we must satisfy this desire some time by some means. On the contrary the desire for pleasure is not a fundamental desire in this sense, and pleasure is not an immediate object of desire like food, for we get pleasure intermediately. Knowledge, wealth, and fame are also not the immediate object of desire. We have objective ways of judging whether others get knowledge of something or not, but about pleasure we have no such means. As pleasure is concerned with subjective conditions, we can only judge through their own witnesses. There are some objective and valid ways of getting such objectives as knowledge, wealth, fame, etc. On the contrary, there are only subjectively preferable ways of getting pleasure, and beliefs about them. Therefore there is no rational choice of the means to get pleasure.

I think there are two directions to seek pleasure. On the one hand we seek pleasure in some familiar objects that provided us with pleasure before. The experiences of pleasure direct our preference. Thus from the objects in which we find pleasure our character and interests reveal themselves. As Ryle points out, enjoyment is "a propensity-fulfilment." On the other hand we sometimes seek pleasure by doing something new, and are curious about pleasure unknown to us. Although from the new trial it is quite uncertain what pleasure we can get, and whether or not we can get pleasure, we are urged to pursuit of something new. These two directions of seeking pleasure are based on the two aspects of pleasure. As to this point, A. Mac Intyre remarks that "it may well be that it takes experience to find whatever it is pleasant, or it may well be that familiarity dulls the pleasure." The two directions of seeking pleasure seem quite different from each other, but from the viewpoint of the subject, we

can find the common factor between them, that is, the self-satisfaction in its wider sense, for the pleasure-seeking life always presupposes the self which is ready to accept pleasure. Although it is a way of self-knowledge, it is fundamentally a passive way of life. Therefore it does not lead to self-improvement or self-cultivation.